

千葉に建築を訪ねる

七 佐倉の川村記念美術館

建築家 三沢 浩

もう一年近く前のことになる。このシリーズを手掛けて最初に思い浮べた、幾つかの千葉県にある印象的な建物のひとつに、「川村記念美術館」があった。ところがこれを訪ねた時の印象が極めて薄く、写真は確かに一、二枚残っているのに、何故そこに行ったのか



どうして見るようになったのか、佐倉のその土地のことを思い出しても、関連性がつかめ得なかった。そこで頼みの綱は千葉支部の加瀬沢さんだと思っただけで、彼も電話の向こうでしばらく考えていたが、思い出せないまま、三時間後に再び電話で教えてくれたので分かった。

それは開館して一年後の一九九一年の六月であり、新建代表幹事であった設計者の海老原一郎が、一九九〇年五月七日に突然亡くなったこともあり、その遺作となった「川村記念美術館」を訪ね懇話会を持ったことよって、実現した建築を見る会のことでもあった。そうでなくては、やや不便な佐倉市の郊外へ出向いて、親しくその建物を見ることもなかったかも知れなかったのである。しかも驚いたことに、その見学会の後、同じ敷地内にある大日本インキ化学工業研究所の一角の集いで、亡くなった千葉支部の大先輩竹村新一郎の回顧談があり、当時『建築とまちづくり』誌の編集委員長であった私が、海老原一郎について語ったというのである。健忘症ではないかと疑ったほど、その記憶が今もないばかりか、美術館にはある印象をもち、その佇いと環境の良さに衝撃を受けた以外に、何も覚

えていないのにはびっくりした。確かに見学会の後、庭園を歩いてぞろぞろと外れにあった研究所の一角に行ったことは記憶にある。恐らく大日本インキの心遣いだと思うが、何か場所がしつらえてあったような気がする。往復に佐倉駅からバスに乗ったことも、新建の会員の誰かと帰ったことも記憶しているのに、しゃべったことについては何ひとつ覚えがない。

この「川村記念美術館」は、大日本インキ化学工業の初代社長川村喜十郎と、第二代社長川村勝巳の夢を、三代目の川村茂邦が実現した、現代美術コレクションのための美術館である。初代社長と親しく、大日本インキ工場を当初から設計し続けてきた建築家、海老原一郎の最後の作品となったのが、この美術館である。その昔、戦後のなけなしの建築界に「大日本インキ工場」の華々しいデビューは、実に印象的であり、当時では珍しく斜めの柱や、カテナリーの屋根をそのまま見せる構造は人目を引いた。海老原一郎の名は大日本インキ工場の幾つかよりも、コンペで獲得した国会議事堂前の「憲政記念館」(1958)の方が有名かもしれない。今見ると何といつともない平凡な作品ではあるが、当時は斬新

であった。日本は戦後近代建築に目覚め始めた、その曙光の一部であったということもある。もはや忘れられそうな建築ではあるが。

その一九六〇年代を抜けて、人生の終わりにあたって恩ある社長二代のコレクションを飾る美術館を、同社の研究所の広大な敷地の中に建ちあげたということは、建築家としての冥利に尽きることもあり、たとえ辺鄙な土地でも、ゆかりの地に残し得たことに、同業の建築家として羨望の念に耐えない。

それは海老原一郎という建築家の人格そのものでもあろうと思っし、風貌とて大して牙えぬ建築家にして、恐らくはだからこそ出来た建築であろうとも思える。ということはこの最後の作品の中に、今までになかった建築の質を残しているからでもある。彼のそれまでの作品はすべてを知らぬまでも、どちらかというと近代の「白い四角い箱」を嫌ってそれから抜け出し、構造を示すために建築の美をいささか失っても、なお機能をその中におさめてきた、早くいえば若作りの建築が続いてきていた。この年代の多くが近代建築に帰依して、ヨーロッパの近代に先行されたかの感があったのに対して、海老原一郎の健気な努力は、私には時を経て「こなれていない構

造」だと映ったのである。

そして今ここに八四才で亡くなった、この建築家の底辺に、未来指向と同時にそれまでは叶え得なかった、ヨーロッパ中世文化への想いがあつたのを見るのである。あれほどまでに近代指向の上に構造を重ね、極めて激しい構造的展開を求めた彼にして、なおこの期に当たって石造り、鋼板円型屋根、長じてから中世かビザンチンの佇いを追い求めていたことを知るのは異様にも思え、その反面で自らの建築指向がヨーロッパの昔に、想い馳せていたと考えると、建築家の個人的ロマンの表出であるということも、考えざるを得ないのである。

彼は東京美術学校卒業後、当時最も斬新な表現派的デザインで若者に評判のあつた石本喜久治の事務所に入り、しかも在学中からセクション派の運動に身を投じ、山口文象等と志を通じ、前衛芸術家の仲間と通じ合う。当時の先端であつたといつて良い。八年後独立し、戦後も維持し、建築家協会会長に推されて建築家独善と決めつける公取委員会でも苦労した。新建代表幹事になったのは遅く一九八一年のこと。その後「核兵器廃絶を求め建築人の会」の世話人もやり、一方で芸術院

会員でもありながら、良心的に一生を過ごした珍しい人であった。

ともあれこの美術館、彼の一生の中でまことに流派の違う結果となっている。それは単に環境に身を横たえるという姿勢だけではなく、内部でも同じであり、入口に二つの円型の塔を吹き抜けて置き、そこに天光光を見せ、大型の菊を咲かせる。このあたりも近代建築とは違う装飾指向なのだが、ミニユメンタル部分を内外に示したあたりが、今までは違った。しかし展示室は機能そのもの、極めて率直に一筆書きの巡廻と殊に目立つ手法もなく、展示は抑えに抑えてこらえる。この点で、メリハリをとり入れ、今までの工場建築の海老原流とは全く違う手法をとり込んでいる。展示といえば、コンペによる「憲政記念館」は代表作なのだが、展示とはいえないほど事務的空間であり、「川村記念美術館」の細かな気配りとは対照的である。三〇余年の歳月を経て、少壮建築家海老原が、自分の想いのたけを果たしたといつても良い。そこにはかつての若気の至りを払拭するような、何かが残されているといつても良い。もちろんそれだけに、人々に好き好きを与えることもあるのだが。

(続)